

ポケットジャーナル



★真夏の六甲人工スキー場に炸裂するロック



右: 原田真二、左: 大橋純子、上: 海援隊

8月2日・3日、神戸新聞社と実行委員会が主催して六甲カンツリーハウスの人工スキー場で「六甲ミュージックマラソン」が催される。

参加アーティストは、泉谷しげる、上田正樹&サウス・トウサウス、原田真二、もんだ&ブラザーズ、カルメン・マキ&LAF、海援隊、大橋純子など。

緑の木立につつまれた自然の中でのエキサイティングなロックの演奏に加えて大阪芸大岡田教授が研究された我が国で初めての本格的レーザービームが、屋外会場にダイナミックな幾何学

紋様、アニメーションを写しだす。

問い合わせ／大阪市北区方町3-41城野ビル、(株)美華土、六甲山ミュージックマラソン実行委員会事務局、(06)3121-8494

★専売公社シヨールームの名称決まる

専売公社神戸営業所では愛煙家にくつろいでもらえる場所を提供し、あわせてPR、公社に対する意見・要望の窓口として、5月15日よりシヨールームを開設しているが、かねてより一般に公募していた名称がこのほど決まった。



372名の応募の中から選ばれたのは、ぱっぱコーナード(愛称PACCO)。

名づけ親になったのは作家の黒部亨氏である。6月14日には漫画家の高橋孟氏のサイン会もかねて名前の発表会が行なわれ、黒部氏と10名の佳作者が表

彰された。

ちなみに、この「ぱっぱコーナード」には、パイプのキーボックスが置かれ、伝言板のサービスなどもあり、ユニークな休息室となりそうである。

★県警と県民のふれ合いの場に「パレス神戸」

県警本部の東隣に、5月15日、シックなレング造りのパレス神戸がオープンした。このパレス神戸は、警察共済組合兵庫支部が建設したもので、地上7階、地下2階。ゆったりとしたスペースに、宿泊、会議、結婚式、宴会が楽しめる。

このパレス神戸は、警察職員の福利厚生を目的として建てられたものだが、県民と警察とのふれ合いの場にしなうという考えで、一般にも開放されている。とかく警察といえば、固苦しい雰囲気を感じがちだが、低料金でいき届いたサービスが楽しめる。



パレス神戸

本誌の表紙でおなじみの小磯良平先生のリトグラフが各所に飾られ、神戸らしい雰囲気を出している。

神戸市生田区下山手通5-140

371-7800

誕生日
ありがとう
運動



十五周年記念冊子の反響

本運動も、この5月8日で十五周年を迎え、記念行事のひとつとして、十五周年記念冊子「草の根福祉運動十五年の歩み」を発行しました。

早速多くの方々から、お便りをいただきました。その一部をここで紹介いたします。

◇「草の根福祉運動十五年の歩み」を読ませていただき、とても感動いたしました。

現代という我が事のみにても処理されぬ忙しさの中に身を置く人間同志。ギスギス、きりきり舞っているちっぽけな人間の群れ。その中にポトリと落ちた一滴の水が、乾ききった心を潤たように本をありがとうございました。

森 典子 (神戸市灘区)

◇過日は、「十五年の歩み」を送ってください、ありがとうございます。小さな種が芽生え、少しずつですが、大きく育つところを感じ、驚き、何と希望のようなのを覚えます。

岡本栄一 (大阪市住之江区)

◇「十五年の歩み」拝受。すでに十五年になりますか。感慨無量、みなさまの方のコツコツした根強い運動に頭の下る思いです。先生とあちこちまわった頃が、なつかしい思い出です。

鷺尾 隆 (神戸市生田区)

○この記念冊子「草の根福祉運動十五年の歩み」ご希望の方は、本部まで(一冊千円・送料共)

〒610神戸市東区西宮幸通8-11-6神戸国際会館一階の郵便局の隣

電話2511-8161内線316

★わが町の夢を描こう！
こども絵画コンクール

読売新聞では、大阪発行
一万号を記念して県下の中
学生以下の子供を対象に絵
画コンクールを行なう。

テーマは、10年先、20年
先、100年先のわが町を想像
力豊かに描いてみよう、と
いうもの。



寄せられた作品

このコンクールは、関西
中国、四国などの15府県で
一斉に行なわれ、各府県ご
とに地方展を開くほか、優
秀作品は大阪市に集めて中
央審査を行なう。

締め切りは7月20日、入
選者名は8月上旬の読売新
聞紙上で発表され、同月21
日から6日間、大丸神戸店
で展示される。

問い合わせ／読売新聞神戸支局
電話34117491

★三人のトランペット奏者
明石で「同窓会」

明石デキシーランドジャ
ズ協会が毎年開いているグ
ッドタイム・ジャズ・フェ
スティバルは、今年で第6
回を迎えるが、今回は7月
16日、午後6時半から、日
市民会館ホールで、明石
のビッグバンドの名門、ブ
ルー・コーツを迎えて開催
される。



賛助出演の大器晩成会と片岡学さん（手前左）

この演奏会では、ブルー
コーツのリーダー兼トラン
ペット奏者、森寿男さんが
明石高校の卒業生であるこ
とから、同窓のトランペッ
ト奏者である伊藤隆文さん
と片岡学さんが参加する。

伊藤さんは明石で酒屋を
営みながら活躍している全
国的に知られるトランペッ
ト奏者、また片岡さんは現
在、北野クラブでトランペッ
ト奏者兼バンドリーダーと
して活躍中の人。また、神
戸市民音楽祭第1回大賞受
賞バンドの大器晩成会や、
明石メイト・オーケストラ
のアマチュア・ビッグ・バン
ドのほか、伊藤隆文とザ・
ボッサリオ、明石純さんら
が賛助出演する。

★さわやか「長唄の夕べ」
長唄界の新しい風、今藤
長之と芳村伊十七の俊英コ
ンビが、6月9日神戸生田
神社会館で、神戸邦楽名撰
会と長之・伊十七長唄愛好
会の共催により、サロン形

式の「長唄の夕べ」を開い
た。
日本コロンビア邦楽部デ
イレクター平井猛氏による
「邦楽の愉しさ」のお話に
始って「三曲糸の調べ」の
さわやかな演奏と「たぬき」
の軽妙しゃ脱なおかしさ、
楽しさは邦楽ファンをた
んのうさせた。神戸
の邦舞界の地方と
して、おなじみの
2人ではあるが、
長唄独自の演奏は、伴奏で
は到底望めぬ迫力とキレ、
運び、緊張感があって、ラ
イブの魅力充分だった。
神戸邦楽名撰会11月刊神戸子内、
係／小泉電話078(331)2246



中央が今藤長之、芳村伊十七両氏

★吉永八三郎（太陽の変容）
展、生田神社会館で
8年前
の夏の夜
劇団
夜行館が
生田神社
境内に芝居小屋を掛けた。
その時、両の手に松明をか
かげ生田の森の闇を焦がし
た四国白童こと吉永八三郎
は大八車を引き恐山霊場ま
で北上したのち夜行館を去
り「何か不思議な縁の糸に
導かれて絵を描くことにな
った」という。今は毎日



吉永八三郎さん

★新収蔵現代美術展 6/3/18/8/17/3
★西宮大谷記念美術展
現代の絵画と版画を中心に
館蔵品展
★さんちか広場
関西二紀彫刻部展 7/3/17/8
江戸屋結婚家具展 7/10/17/8
こうべ芸文美術展 7/17/17/8
第19回ロバの会絵画展 7/24/17/8
★ギャラリーさんちか
兵庫県美術作家協会会員展
第4回幼稚園児図画展 7/3/17/8
こうべ芸文美術展 7/10/17/8
旧三商大写真展 7/24/17/8
★シティギャラリー
鈴木俊宏版画展 7/12/17/8
★ギャラリー神戸時代
羽多悦子作品展「わたしは女」 7/11/17/31
★白いアトリエ
藤原昭三名刺展・神戸風景（水彩） 7/6/17/13
★ギャラリー・ド・ラ・ヴェ
カシヤール展 7/5/17/20
★青屋ギャラリー
ブッフエ石版画展 7/12/17/20
★そころ神戸店美術画廊
古刀から現代刀まで日本刀剣展 7/5/17/9
第三回現代人気作家版画展 7/10/17/16
鑑真和尚上里帰りにお伴して
武井洋右墨彩画展 7/17/17/23
フランス絵画名品展 7/24/17/30
★大丸神戸店美術画廊
矢野旦新作ガラス展
清紅会日本画展 7/7/17/3
例井一夫洋画展 7/17/17/3
チェコベヒーミングラスとペネ
ュエグラス展 7/23/17/29
★三越神戸店美術画廊
女性を描く油絵秀作展
巨匠陶芸展 7/6/17/20
★生田神社会館二階ロビー
太陽の変容・吉永八三郎画展 7/19/17/25

美術ガイド



「展覧」をモットーに絵筆を揮う日々という彼が、光と円型の絵画(太陽の連作)をひびきつけて由縁の生田神社で個展を開く。

■太陽の宴客——吉永八三郎個展7月19日(土)〜7月25日(金) 初日PM4:30よりオープニングパーティ於生田神社会館2階ロビー

★みんなげんき?

「げんき」

阪急夙川、阪神香櫨園から歩いて5分、夙川遊歩道



みんなげんきジム

からもほど近い国道2号線沿いに、白地に目の覚めるような鮮やかな虹が描かれた二階建てこれが「みんなげんきジム」だ。

「母親も子供もみんな元気」にとの願いを込めて名付けられた「みんなげんきジム」は、指導にあたる米田、山田両先生がテレビでおなじみのせいもあり、趣旨に賛同する母子づれで、オープン1年ちよっとというのに大盛況。

7月には昨年に引き続き幼児教育指導者のための講習会を開くほか、母と子のハイキングやコンサートなどジム以外での活動も熱心に行なっている。

☎0798-126-0020

花時計



文化は醸成される

兵庫県立近代美術館が10周年を迎えた。県民、市民の一人として祝意を表したい。この美術館で展開された催しはまさに全国的、世界的視野での美術展であり、「エミリオ・グレコ名作展」、「ルノワール展」、「ブルーデルの全貌展」、「ヘンリム

ア展」、「巨匠マイヨール展」、「南フランスニース美術展」、「エルンスト展」、「ムンク 版画展」、「セガンチーニ展」、「マリノ・マリニニ展」、「ミロ展」、それに「ミレー、コロレ展」、近くは「ルドン展」また、毎年行われる「アートナウ展」など深く印象に残る催しが多いそれは、ただ美術界の展覧会という業績だけの効果だけではなく、兵庫県、神戸市のイメージづくりには大きく寄与していることを知るべきだ。

★フリテンくんプレゼン

月刊誌「キャンブルパンチ」に毎月掲載され、若い人からお年寄りまで幅広く読まれている植田まさしのギャグマンガ「フリテンくん」がこのほど竹書房から出版された。

日常生活をギャグにひねった「とぼけた奴ら」、「お笑い独演会」、夏休みテーマの「夏休みハント白書」などのほか、マジジャンを扱った「雀狂時代」など笑いを満載したこの本を、本誌愛読者5名様にプレゼント。

希望の方はハガキに住所・氏名を明記の上、本誌編集部「フリテンくんプレゼント係」まで。

また、神戸の有名なカネディアンアカデミナの新生徒たちが頑張っている「仮名手庵歌舞伎」が10年目の舞台を披露する。とにかく青い眼の歌舞伎役者たちの奮闘ぶりは凄まじいという言葉に尽きる。信じられないような本格的な歌舞伎を見せる。そして、10年。当事者たちの骨をけずる努力が実を結ぶのである。

そんなつかさねが文化を創り、醸成される。そして、都市のイメージが彩られてくる。△Y△

★KOBE POST

★「12人の怒れる男」のパロディ版筒井康隆氏の書きおろし「12人の浮かれる男」を7月22・23日、神戸文化ホールで上演。川名孝演出山下洋輔音楽、出演は納谷信朗ら。入場料は1階¥2000、2階¥1500、申し込みは各プレイガイドまで。

★書家の望月美佐さんが6月26日Miss's Birthday Party「Sweet & Bitter」を開いた。プログラムは、美佐さんの動の書「夢二題」と沖繩みやげ話、仲村米子さんの沖縄舞踊、歌手の高橋まり子さんの新曲「ささね」(作詞・作曲清堂雅生、美佐さんタイトル書。

★柴田旭堂の世界というタイトルで筑前屋のLSP三枚セットが(一万円)CBSソーニから8月21日に発売。お申し込みは倉合区上筒井通5丁目4-12番(21)161柴田宅へ。

★シンガーソングライターの新井満さんが、NHKみんなのうたの、展覧会で逢った女の子の「作詞(大野雄二さんが作曲)」し明けています。シングル版はキングレコードより発売中。¥600

★日本専売公社神戸営業所長の武田洋文さんが6月初めに関西支社へ栄転され、後任に鎌田光所長が着任されました。

★版画の飯田三代さんが、O・K・M・Y・O版画工房を6月11日から開校。銅版画の色々を、飯田三代、前田サトコ、朝比奈逸人の三人が講師。¥5300大阪市北区天満5ノ9ノ15北ビル3F ☎06(346)9257

★カメラマンの赤松克麿さんが、新スタジオを開設されました。フオスタジオP・ACK・第1スタジオ/〒650神戸市東区栄町通2ノ40・日産ビル502 ☎078(892)0808第2スタジオ/〒652神戸市兵庫区島上町2ノ21アカマツビル ☎078(89)7960

●神戸元町で生まれた美味●

とんかつ



神戸市生田区元町通一丁目二四
電話〇七八三三・〇七五五代ノ七

とんかつ
二つ茶屋

- ビーフ(神戸肉)かつ
- ビーフバター焼
- ロールかつ定食
- チーズかつ定食
- ヘレかつ定食
- ロースかつ定食
- 海老かつ定食
- かきフライ

	元町駅	
	とんかつ一番 二つ茶屋	舞川
元町三丁目	元町一番街	大丸

暑中お見舞い申し上げます

CHISATOでステキなサマーナイトを……



STAND
CHISATO

阪本 千里

神戸市生田区下山手通2丁目7-1 KSMビル1F

TEL (078) 331-4730

5:00PM~0:00AM 日曜・祭日休



暗葉樹

刀禰喜美子

繪／南和好

連載小説〈第Ⅰ回〉

ろうそくの灯が正面で輝いていた。

暗い会場に急にはいった伸子は視界がぼやけ、明るさを求めて灯の方を見た。空気の流れが静止しているのか、ナイチンゲール像の右手のろうそくの焰のゆれはごく微かだった。左右対称の整った形を保ちながら、闇に向って光彩を放っていた。

「綺麗な灯——」

伸子は思わず呟いた。呟いてから、焰は、特にろうそくの焰は自分にとって決して快いものではないはずだが、と思った。焰を美しく眺める自分に安堵した。

伸子は目が慣れてくるまで動かないで、扉を背につつまっていた。人の気配がして顔馴染みの事務員が、どうぞ、と来賓席に案内した。その席には胸に赤いバラをつけた医師会会長や病院協会会長たちが坐っていた。伸子はこの学校に勤務してまだ一年余りで、しかも非常勤講師だ。伸子の方は顔を知っていたが、向うは伸子を知らない。伸子は国語を担当していた。こんな席は窮屈だな、と思ったが、もう戴帽式が始まっていて、静寂を乱してまで移動することもないとそこに腰をおろした。

准看護学校では生徒が各実習病院に実習に行く前に、戴帽式を行うのが慣例になっていた。一年間の教室での講義が終ると、初心のゆるみを引き締め、使命感を再確認させるために戴帽式を挙げる。実習はかなりきつい労働学習で落伍する者もでてくるようだ。

専修学校制度ができると各種学校は志願者が増加した。精神病院協会が経営しているこの准看校は、生徒の大半が男子である。勤務のかたわら、准看護士の資格を得るために週三回登校している。義務教育終了者というのが入学許可の条件だから生徒と呼ぶべきなのだが、大学卒や高校卒など学歴がさまざまな上、社会生活を経験した成人でありすぎるため、学生と呼んでいる。

開会の辞が済むと暗幕をめぐらし、消灯して闇を作り出し、演壇の中央に据えられたナイチンゲール像の手燭に点火される。伸子は予行演習にたち合っていたから、

順序は解っていた。ピアノが厳かに教会音楽を奏で始めた。学生の名前が一人一人読みあげられていくことに、学生はそれぞれの席から中央の通路に歩み出て、演壇へと進んでいく。

演壇では担任の教師が学生達に帽子をかぶせる役を受け持っていた。男子には胸にバッジを付けてやる。教師達は今日はナース姿をしていた。ナースの育成はナースの手で、というのがナイチンゲールの方針で、それが継承されてきている。教師陣は看護婦が主で伸子はその意味では部外者だ。伸子は今まで病院へは患者としてしか行ったことがなく、医療事業関連の学校で教師をしているのがなんとなく馴染めない。

帽子やバッジを付けたあと、学生は各自が手に持っている燭台のろうそくにナイチンゲール像の灯を移し取る。分灯することによって、ナイチンゲールの精神を自らに導入した形を表徴する。焰は分灯されてその数を増し、式場はみるみるうちに焰の波となってきた。焰はリズムに合わせて流れ作業のように激みな動いては止まった。

学生達は来賓を意識してか、日頃反抗的な者も怠け者も神妙にすまし、従順で勤勉な者は一層従順さをあらわにして、緊張している。自分達こそが先人の意志を継ぎ、病める人の支えになろうと、少くとも今の瞬間は決心しているのだらう。焰の横の表情は輝いていた。

ナイチンゲール誓詞の斉唱にそっぽを向く反抗的な学生までもが、今は焰の一つ一つのそばで素直な顔をしている。白衣を身につけ、帽子を授かり、分灯をする、といった行為は内面への働きかけにかなりの効を奏している。形式や儀式はその意味で力があるものだな、と伸子は見ている。

学生達の素直さに反して、伸子は次第に息苦しくなってきた。焰の波はやはりある場面を喚起させた。会場にはいった瞬間、美しく感じた灯は、伸子に圧力を加えていく。焰を見てもたじろがないとの安堵は空しく、過

去はやはり及び上がつてきた。もう決して意識上にのせまいと堅く封印した過去が、伸子の足許から攻め寄せてきた。伸子の意志に逆らうように過去はぼっかり傷口を開けて伸子を誘い込んだ。

闇であつた。

空襲による配電線の故障でモーターが止まり、工場全体は闇と静寂に包まれていた。音のしない工場は死に絶えた村のように無気味であつた。広島も長崎も新型爆弾で壊滅し、戦争の先行きに対する不安は、どの人の胸にも滲透していた。不安を口に出せないもどかしさはこの闇そのものの暗さに似ていた。昼の空襲だった。暗くなる以前に大体の人達は退社していたが、まだ居残っている人のいる気配は、ろうそくの灯が動くことで解つた。

伸子達動員学徒は、トラックの手配が付くまで待機しているうちに夜になった。空襲による被害はなかっただろうかとお互いの家族の安否を気遣いながら、通路に三々五々集合していた。

「全員、揃っているか」

聞き覚えのある大声がして、軍服を着た木谷教官が通路の曲がり角から姿を現わした。キュッキュツと皮の長靴を鳴らし、ろうそくを片手に誇らしげに近づいて来る。教練の授業中より威厳が感じられるのは、帯刀をしているせいだ。肩章を見ると中尉である。そんなに位が上なのかと改めて目焼けた木谷を伸子はみつめた。

「今、八時前である。私鉄不通のため諸君を地下鉄まで運ぶ。警戒警報解除まで待つ予定で今までいてももらったが、もう夜も遅くなることだしこれ以上待てない。全員登乗すること」

木谷は八系乱れぬ機敏なる行動Vが好みで、気にいらない程度でもやり直しをさせる癖があつた。匍匐訓練だといって伸子達をしゃくとり虫のように地面を匍わせ、それを仁王立ちでにやにや笑いながら見下ろしていた。

「軍隊はもつときびしいぞ。諸君と同年輩の男子は死ぬほど苦しい訓練を受けているのだ。それ位何だ。女だからといって、女々しい泣き言は許されん」

と、まるで苦痛の与え方が足りないといわんばかりの目付で睨んだ。伸子の白い体操服は土で汚れ、木の根っこかガラス片が胸に突き刺さって血が滲んでいても、同情的な目をするのが損だというようなきつい目付で睨んだ。

木谷のうるさい性癖を教練で経験ずみの級友達は、点呼の声もはきはきと、動作もきびきびと整列した。警報中であつたから全員頭巾をかぶっていた。伸子はそれを見た時、

「しまった」

と小さく呟いた。防空頭巾の中には今日持出すことにしたサツカリンとズルチンのボール箱はいっていた。

伸子はしっかりとそれを小脇に抱えていた。八木谷教官が今日の引率者だと解っていたら、持出しを今日にしなければならぬ。今から置きに行こうかV

伸子は思案していた。八暗いから見付けられずに済むかも知れないV

日直が木谷に人数を報告している。木谷は大きく頷いている。木谷はろうそくの焰を一字を書くように移動させ、すばやくたった一人頭巾をかぶっていない伸子に目を走らせた。

「佐伯、頭巾をかぶれ！」

「はい！」

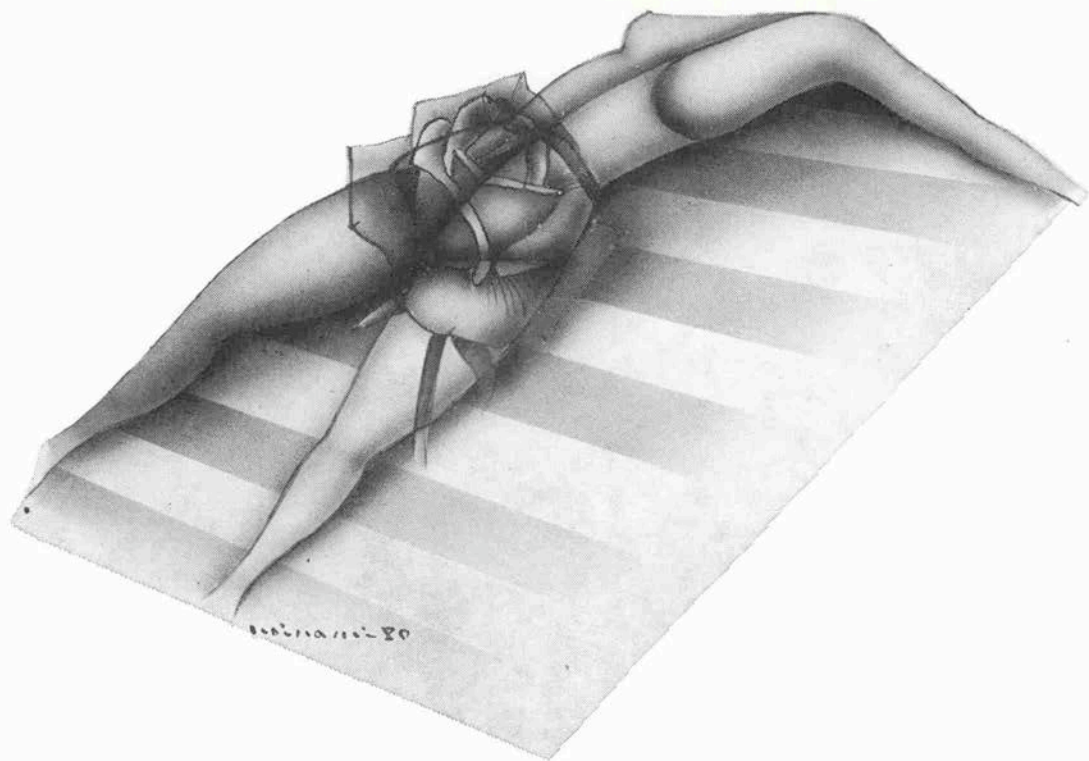
伸子は返事だけは大きくしたが、それ以上どうすることもできない。

「どうしたのだ。早くかぶれ」

「はい。あの——、さきほど、壕で待避中に汗をかきまして、濡れております」

「汗は誰もかいておる。まだ警報中なのだ。規則だ。早くかぶれ」

絶望で頭がぼつとしてきた。金しばりに合ったように



動けない。奇妙な呻きをあげたくなつた。手足が震えた。

木谷はろうそくの焰をゆらゆらさせながら、伸子の方に歩いてきた。軋む皮靴の音を伴奏に、焰はめらめらと舌を出して伸子を捕えに來た。その焰は物事に黒白をつけねば気の済まぬ裁判官の眼光のように鋭く輝き、悪事を暴露せずにはおかぬ摘発者の瞳のようならんと光って、伸子に迫ってきた。伸子は消えてなくなりたかつた。爆彈が落ちて木谷も自分も粉々に散ればよいと思つた。が、じつとしているしか方法はない。

「貴様は私のいうことに逆らうのか。よし、それなら、私がわざわざ手を貸してやろう。頭巾をかぶせてあげよう」

木谷は伸子が抱えている頭巾を小脇からひたつた。同時に床のコンクリートに物が碎ける音がした。錠剤壺から飛び散つた白い結晶が、夜目にもきらきら光っていた。伸子は無念な想いに囚われた。柴野の悲鳴が聞こえてきたような気がした。伸子と柴野が床に打ちのめされて碎けているかのようだった。

「これは何だ」

頭巾から思いがけず品物が飛び出した愕きで、木谷は焰を地面にずり下げながら叫んだ。伸子の足許に屈んだ木谷の首があつた。木

谷の腰には邪魔そうに刀がぶら下がっている。この首をこの刀で力一杯切りつけたなら、どんなに救われるだろう。伸子は残忍な心を隠して、直立不動のままつつ立っていた。

「葉だね、これは、貴様、これをどうしたのだ。どうする気だったのだ。盗んだのか」

サツカリンやズルチンと知ったなら、木谷はもっと激昂するだろう。貴重品でもあり、密造品でもあるからだ。△大変なことになった▽

と級友達は固唾をのんで事の成りゆきを見守っていた。伸子は途方にくれて嘆息し、ただうなだれた。

トラックが到着した、と工員が知らせに来た。木谷はその工員に伸子を見張らせ、級友達を引率して行つた。

工員は飛び散ったガラス片や製品の粉末を見て、おおよその察しがついたのだろう。

「運が悪かったな」

と同情深くいった。引き返してきた木谷の姿を見ると、関わり合いになるのを怖れるようにすたすたと闇に消えていった。学徒専用の防空壕の階段を降りていく木谷と伸子の影が大きく揺れていた。

全員の戴帽と分灯が終了すると、暗幕が除かれた。会場は夜が明けたように明るくなった。暗いなかの白衣はコントラストの妙を見せて、贅りのある集団に見えるが、明るい白日に晒けだされると平板な固りになる。

来賓の挨拶が次々に始った。伸子は退屈になる。挨拶ほど空々しくて無意味なものはない。まだ暗い過去を回想している方が、冷たい感触ながら切実さがあつた。

ナイチンゲール像の焰をナース姿の教師が大きく手を動かして消した。焰がふっと掻き消えた。

木谷も伸子への蹂躪が終ると、むっくりと起きあがって、ろうそくの焰をふっと吹いて消した。教官としての良心の責がそうさせたのだろうか。闇の中で何か独り言を呟っていた。

伸子は終始醒めた目で、自分の軀の上にのしかかっていた木谷を眺めていた。木谷の熱くて硬い突出が伸子の中心部に嵌め込まれるまでは、足で蹴ったり股間を閉じたり抵抗を試みた。だが伸子の軀の上で木谷が動き始めた時は、これが強姦というものか、と諦めていた。いや、この行為に到るまでの反抗が強姦で、今は従順なのだから強姦とはいわれない、本当に抗うのなら木谷を殺すか、自分が死ななければならないのだ、そんなことを考えていた。木谷は伸子に関係なく、勝手に激しく運動し、勝手に呻き声を発し、勝手に汗をかき、勝手に動きを止めて静かになった。木谷は勝手に行動していたのだから、私は少しも参加しなかったのだ、私は少しも脅かされなかったのだ、そう考えようとした。凍った微笑すら泛べて冷静でいたであらう、そう思おうとした。

(つづく)

□刀称喜美子／作家▽



このほど創作活動の拠点を同人誌「柳絮」^{りゅうじよ}から「奇蹟」(六月創刊)へ移し、新たな心構えで執筆に取り組んでいる。十年ほど前から大阪の準看護学校で国語の講師を勤めているが、そこで見聞した諸々が作品のなかにうまく生かされている。目下のテーマは、本当の意味での女性の自立とは何か、を女の側、主婦の立場から書き込むことにあるということだ。羽曳野市在住。

□南 和好／洋画家▽



神戸新聞社の図案課に勤務するかたわら、エロティシズムをテーマにした作品を描き続ける。二月に、「化石になった女(遠い日の記憶)」で金山平三記念美術賞を受賞。五月末日から六月末日まで、ギャラリー神戸時代で南和好カット原画展を開いたばかり。昨年は神戸文化ホールで「小松左京ステージ・三つの明日」の舞台美術を担当するなど、多彩な活動を続けている。

□第五回

神戸文学賞 神戸女流文学賞 作品募集

小社は昭和51年創刊15周年記念として神戸文学賞および神戸女流文学賞を創設いたしました。これを機に有為の新人に新しく道を開くとともに、西日本における文学活動の一層の発展のために微力を尽したいと願っております。過去の受賞作品は次の通りです。

・第一回神戸文学賞「島之内ブルース」(田原新二 尼崎市) 同女流文学賞「ベットの背景」(小倉弘子 大阪市)
・第二回神戸文学賞「絶捨て」(奥野忠昭 大阪府柏原市) 「生活」(吉峰正人 神戸市) この回の神戸女流文学賞は該当なしで、神戸文学賞を二作が受賞。

・第三回神戸文学賞「自由と正義の水たまり」(蒼竜一 奈良市) 同女流文学賞「夢の消滅」(大原由紀子 高知市)
・第四回神戸文学賞「溶ける闇」(高木敏克 神戸市) 同女流文学賞「影と棲む」(田口佳子 伊丹市)

ここに第五回文学賞を公募するにあたり、多数の意欲的御投稿をお願いするとともに清新かつ強力な作品の出現を期待する次第です。

△募集要項▽

一、神戸文学賞は男性作品、神戸女流文学賞は女性作品とし、共に西日本在住者で応募作品は一篇に限ります。

一、応募作品は未発表原稿、または締切以前、一年未満に発行の同人誌に掲載したものに限ります。

一、原稿枚数は四百字詰百枚前後。

一、原稿には住所、本名、年齢、職業、略歴を明記し、四百字程度の作品主題(創作主旨)をつけて下さい。

一、締切りは八月一五日(当日消印有効)

☆なお、選考は本誌が依頼した選考委員によって行います。

一、入選発表は本誌昭和五十六年新年号誌上で、同号より作品を掲載します。

一、原稿の返却、選考経過などに関する問い合わせには応じかねます。

一、入選作品の著作権は本誌に属します。

一、入選作品各一篇には副賞として賞金二十拾万円が贈られます。

一、原稿の送り先、お問い合わせは、神戸市生田区東町一三の一 大神ビル七階 月刊神戸っ子「神戸文学賞係」まで。

電話〇七八―三三一―二二四六

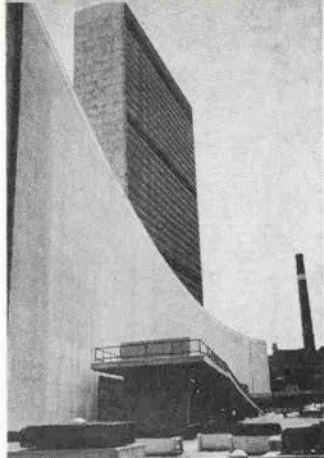
主催／月刊神戸っ子

素足の アメリカ

蒼竜一

〈作家〉

裸足で歩くことに、それ程の抵抗を覚えていた訳じゃない。靴を履こうなんて知恵もなかった。アスファルトの灼ける臭いや、ハンバーガーの肉片の潰れた土埃を踏んで、歩いたものだ。とにかく、明日以外に喪うものは何もなかった。それでも、明日と云うものは、分つてしまえば、もうおしまいさね。誰と会い、どんな飯を喰い、何時には家に帰る。そんな明日なんて、ちつとも欲しいとは思わなかった。人は明日に希望を託して生きてゆく。分らないからこそ、人は明日に希望を託して生きてゆく。



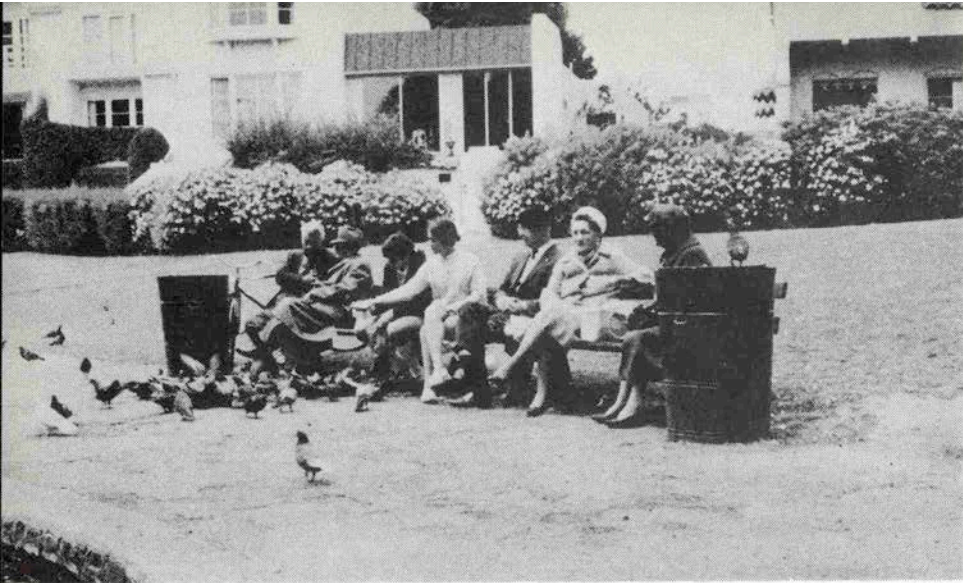
〈2〉TOMORROW

私は起きあがると、裏庭に回った。恐怖が去って激しい尿意を催していたのだ。

私は鮮やかなオレンジの実が目には沁みるような樹陰で、震える脚を踏みしめて、小便をした。アメリカに上陸した時、ロングビーチの港から、ロスのダウン・タウンまで車に便乗させてくれた二世のオヤジが、「ここは日本とは違うんだ。立小便する時は気を付けろよ」と言った。大方、罰金でも取られるのかと思ったら、住居不法侵入でガンで撃たれても文句は言えないという意味だった。これが、アメリカについて聞かされた最初だった。小便するのも生命がけかと、ふと振り向いて、私はピカ

ピカに磨き上げられた一枚板のガラス戸の向こうに、飯を食い付けるようにしてこちらを窺っている白人のばあさんと、あの馬鹿たれジャーマン・セバードの二つの顔を認めた。

一瞬、私は含羞^{はくしう}の笑いを浮かべて、こくんと一つ辞儀をした。この日本的な挨拶の仕方が、ばあさんの癪に触った。でも一体、どんな表情を作ったらいいのか、それに私は、今しがた殺されかけた人間である。小便位大目に見てくれてもいいじゃないか。もしばあさんが、日本人はマナーが悪いというのなら、私は言ってる。アメリカの車は理由なく人を轢き殺すためのものかと、それ



アメリカの公園には老人が多い

にはあさんの飼っているアメリカの犬は、敵と味方の区別も出来ない石頭^{石頭}なかと。案の定、仕事を終えて帰る支度をしている時、ばあさんが飛び出して来た。手にチエッキをひらひらさせて頭の上で振りながら、「おそろしか、おそろしか」とやってくる。顔付きから、かなり興奮しているのが分る。

「芝生の上は黒人に車で走り廻られるし、日本人の庭師には、庭で小便されるし、もうこんな事は沢山。やめてよ」と、怒っている。彼女は、チエッキを私に押し

つけると、来週からも来なくてよいと言いつ渡した。興奮している割には、チエッキに打ち込まれた金額は、何十何セントの単位迄その日までの支払いを正確に計算していた。

「オーケー、こんな危い家で働くのは、私も願ひ下げだ」と、とにかくジャツのポケットに二つに折ったチエッキを仕舞った。

トラックに乗り、エンジンを吹かすと、ああ誠になっちゃったと私は言う。友人が、助手席の窓から屋根へ回した手で、拍子をとって、車の屋根を叩いた。彼は、日本の流行歌を歌ったりする時にも、思いがけなく車の屋根を叩いたりするものだから、運転に熱中しているような時には、心臓がどきどきする程、吃驚したものだ。背の高い友人は、いきおい手も長く、車の屋根を打つ位置は運転席に近くなるという訳だ。

帰り途にもう一軒、週一回契約の顧客^{顧客}の庭で働き、ちようどその日が支払日である事に気付いて、玄関脇のインター・ホーンを押した。

幸い夫婦共居て二人が顔を覗かせたが、判り難い詠りのある英語で、釣り銭はあるかと言う。いや私はそう聞いた。この言葉は、多分金を待ってくれと言うに違いないと予測していた私を、喜ばせた。これで友人にも、今日の日当を払ってやれると胸をなでおろして、車に小銭入れを取りに行き、玄関に再び立つと、暫くして奥から二人そろって出て来た黒人夫婦は、両手に何かを抱えている。覗き込んだ私は、今しがたチエンジを、釣り銭ととった愚を悟った。文字通り小銭と理解すべきであった。そして、なまじっか常識^{常識}の発達した人間の視野の狭さを思い知らされたのだった。

一ヶ月の給料を、私はダイム(十¢)とニッケル(五¢)ばかりでもらったのである。その勘定をするのに、また一苦勞。あまつさえ、不器用な亭主が、コインを床にバラ蒔くものだから、何だか自分が守銭奴みたいに錢を拾っているようで、物哀しい気がする。

友人がそれを見て、こんな商売の仕方してたら駄目だ、絶対に金儲けは出来んと、自信をもって断言した。私も何だかそんな気にはなったが、まあいいさ、今にようになる、とすっかり口癖になってしまった言葉を口にする。しかし、迫力はなかった。私は腹いせに、こんな小銭ばかりよく集めたもんだと皮肉を言ってみた。すると腹が立って来た。貴方がたは少し非常識だ。私はてっきり小銭の釣り銭が要るのかと思ったと言った。その言葉に、黒人夫婦は笑いながら、ラス・ベガスでスロット・マシンに勝つてねと、にやにやしている。私は三十五\$、ポケットというポケットすべてに小銭を押し込んで、トラックに乗った。日本のスロット・マシンと言えば、パチンコだろうが、さしずめパチンコ玉をポケットというポケット一杯詰め込んで歩いているようなものだ。

これについては後日談があつて、私が暫く通うことになった学校で、三分間スピーチに、常識という題名が与えられて私が指名されたことがある。居眠りしながら、教師の話の聞き流していた私は、苦しまぎれに、この話をした。チェンジを釣り銭と解釈したというより、我々には常識外のことは、仮え、言葉が分つても所詮理解出来ないものだという事を話した。白人の中年女性の語学教師は、あけすけに笑った、少なくとも十分間は笑い続けて、苦しさに途中でハンケチで涙を拭うて、また笑い続けた。ただ、生徒だけは、シラけていた。御愛想に笑ったのは、せいぜい二十秒。後は肉付きのいい、白い顎が波立っているのとか、大きく口を開いた顔が酔っぱらいのように、紅潮しているのを眺めていたにすぎない。笑った奴と言えば、その帰り、友人をボーディング・ハウスまで送って行き、スーパー・マーケットに立ち寄った。

鶏を一羽、もちろん丸裸にしたものとか、その他ビールや野菜などを買ひ込み、レジで金を払った。私はポケットを軽くしたい気持から、多めに物を買った。そして金を払う段になって、まるで鳩のエサでも取り出すよ

うに、ポケットから小さな硬貨を握りしめてはカウンターのの上に散らした。レジの女性は、必死に笑いをこらえていたが、遂に堰を切ったように吹き出した。こらえていた笑いというものは、爆発するものだ。周囲の人間は、一度に私を見た。私は、赤面して、背中にじつとりと脂汗をかいていた。ポケットを軽くすることに気を奪われていた私は、自分の滑稽さまでは気が回らなかったのであらう。それでも私は、日本に居れば他人様に笑われることもなかったのになどとは考えずに、ダイムとニッケルをカウンターの上で分けて、更に一\$毎の山を作っていた。笑いは、人を性的にするものだろうか。レジの女性は、背後のレジの同僚に向かって、わたし男が欲しくなったわと言ったのである。私は、計算をミスして、手元が狂ったが、彼女はちらっと、ウインクを寄こして、素速く小銭を算えてくれている。私はもう夢中で、紙袋やビニール袋に買物を詰め込んで、外に出た。トラックに乗って、煙草を一服つけ、さて今度はどうやってトラブルなしに自分の家の中に入るか、頭を悩ませねばならないのだった。

私は一計を案じて、人目のある背口のうちは表通りに車を停めて置き、その後、裏の車庫へ車を入れることを思いついた。いくら連中が物好きでも、夜中まで私を苛めようと待ち構えていることはなからう。私は表に車を停めると、家に入り、シャワーを被って汗を流した。そして、体にバスタオルを巻きつけたまま、ガス・オーブンに鶏を丸ごと一羽入れて、ビールを抱えて応接間に来た。ビールの栓を抜き、その昔この家を建てた白人が、買い備えたであろう大きなソファに、一人ふんぞり返って、新聞を開いた。天井には豪華なシャンデリアが明りを送っている。そのうちに、電話が入って、友人が今夜ボーリングに行くので誘いに行くと言ってきた。私は、どうせ深夜に及ぶであろうから、十五分程、そう、鶏の丸焼が出来るまで眠っておこうと、寝室に入った。寝室と言っても、三つあるのだから、どこに入るか、ちよっ



気を吐くブラック・パワー

と迷う訳だ。巨大なダブルベッドに横になると、バスタオルを引き寄せ、気楽なものだ。そのまま眠ってしまったのである。

友人が数名、それも私の知らない友人の友人が混じっていて、車でやって来た。

彼らは、私が服を着る間、友人の友人に家の中を見せるため案内して回っている。大邸宅だな、とか、隠れんぼう遊びが出来るとか、日本に帰ったらとてもこんな家には住めんとか言いながら、クローゼットを開けてみた

り、ダブルベッドの堅さを女の子などはお尻で調べたりしながら、家の中をあらちこちらへ移動する。沢山あるクローゼットは空っぽ。幾ら大きな家に住んでも、荷物は、旅行鞆一つ。これは何とも奇妙である。そのうちに飲み物は？との声に、キッチン冷蔵庫にビールがあると私が言い、その直後、火事だ！の叫びに、全員が台所に馳せつけた。開いたキッチンのドアから、煙が吹き出してくる。飛び込むと一メートルほどの赤い炎が吹きあげ、オーブンは、ぼうぼうと燃えている。すぐガスの元栓を締めた。そして、煙にむせながら、水道の蛇口を全開にして、水をぶっかけた。途端に灰かぐらの如く、黒い煤が部屋一面に立ち上った。

元凶は、鶏であった。無残にもよく太った鶏の丸焼きは、アメリカン・フットボール程の大きさの炭に、変貌してしまっていた。

ボーリングに行く彼らを送り出して、私は一人残って後始末をしなければならない。

無責任なもので、友人の友人である三世の女の子などは、もう五分発見が遅かったら、あの人日本に還れないわよ。おジイさんになるまで、永久にこの燃やした家の返済に追われるって訳――

私は、トラックから庭木の散髪に使う脚立を取り出して来て、キッチンの白い壁を雑巾でふき始めた。煤というものは、ふけばふく程壁に喰っ付いてしまうものだ。それによく肥えた鶏には、脂肪もよく乗っていたのである。煤まで脂ぎっている。洗剤をつけてごしごしこすり、ようやく一応の形を整え終ると、既に十二時を廻っていた。

またシャワーを被り、汚れた服をダンボール箱に詰めて、深夜までやっているレストランに遅い晩めしを食いに行った。めしを食う間、隣のコインランドリー（二十四時間営業）で、汚れ物を洗濯器に放り込んで機械を動かしておいた。

レストランのウエイトレスは、顔を知っていて、頻繁

にコーヒーのお代りをしてくれる美人のブロンドだが、若い癖に、首の辺りには何時も地図を描いたように、垢をためている。余程、不潔好きな恋人でも持っているのだろうか。

私が深夜働くということは疲れて大変だねと、優しい言葉を掛けると、何を誤解したのか、ガラス壁の向こうに見える私のトラックの背にある芝刈り機を指差して、あなたも夜、草を刈るのは大変でしょうね、と同情する。やっぱり、少し足りないのかしら、と思ったり、それでも私の下手な英語を、ファンタスチックと賞めてくれる処は、彼女とても心根の優しい女性なんだと思ったりもする。

固いステーキを食べ終えると、顎が疲れた。

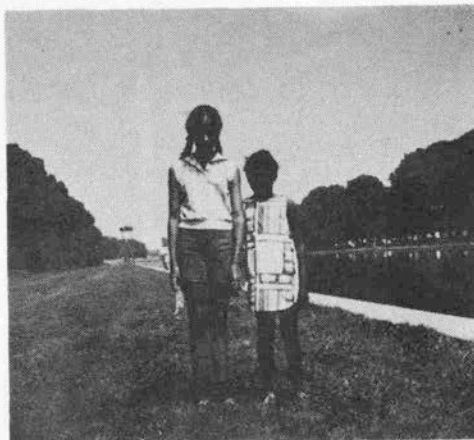
コーヒーを、何杯も飲んで（彼女の厚意を無にしないために多少飲み過ぎはしたが）、彼女のオヤスミという言葉を聞くのは好ましい。グッド・トモロー、フォー・ユー（よい明日をね）と私が言い、もう明日は始まっているのよ。一時間前から——と彼女が時計を見あげる。私と彼女の決まりきった定食みたいな会話。こんな時、私は不思議に友情みたいなものを感じる。まさに、**暁き・君**と言えは雅びやかで美しいが、彼女は同時に、垢付きの君でもあるのだと思う。

家に帰ると、いつも石やアバカドの飛んでくる路地もさすがに寝静まって物音一つしない。

車庫にトラックを入れ、ビールを飲んで、死んだ真似をするつもりになって、私は目をつむった。

翌朝、五時に起きるはずが、七時に目が覚め、すぐ車庫に飛んで行く。**ガッデム！**

開き戸が一フィート程あいている。トラックの荷台に



折りをこめて……（写真はいずれも筆者撮影）

とび乗り、道具を調べると、大物は盗られていない。ただ、ハンマーとかドライバーなど、小物をいかれた。タイヤを調べた。釘を打ち込まれた形跡はない。少し胸を撫おろして、バジャマのまま表通りに車を回した。（今日も今日とて親方さんに芸が不味いと叱られて、咎でぶたれて……）、日本人街で聞いた古い流行歌である。

口笛を吹いてみる。パームツリーの長い影が、朝露に濡れた芝生に尾を引いている。

向こうから、犬を連れた五十歳位の黒人がやって来た。

この界隈の顔役である。私は、陽気に挨拶をすると、近付き、この界隈の連中が私に悪戯をして困る。何とかしてくれ、と言った。

彼は黙っている。私は近所の人達に一切の悪意は持っていない。それにどうして、連中は俺を追い出したがっているのだ？

男は、犬の綱を引っぱり、自分に関係のないことだ、警察に行きなさいと言う。

「もしポリスに行って、恨みを買った私が、襲われたらどうなる。殺された後でポリスが来ても、後

の祭りだ。命は一つしかない」

男は面倒臭そうに、ポケットから無造作に拳銃を掴み出した。

「これしかない。この国では、自分の身は自分で守ることが一番だ。その次にポリスだ。あなたも銃を買いなさい」

物静かな男だ。にこりもしないで、朝の散歩を、この平和を心から味わっている風な足どりで、歩いて行った。